2012 6 / 3

**葉のことば　から**

**魔法の木**

みんなは、さらに歩き続けました。するとまもなく数えきれない色とりどりの葉っぱをつけた一本の木をみんなは見ました。

しかしみんながその木に近づいていると、葉っぱは空中にとびあがり、木の周をぐるぐるまわりました。するとみんなには、その木が銀のようにかがやく長いあごひげをつけた背の高い老人だということが、わかりました。そして葉っぱというのはあらゆる色あらゆる種類の鳥たちなのでした。

（フォークナー著　）

**モーマンヒルズ**

僕が準備している間に、二人はまた向きを変えた。景色と向き合い、背中を僕にむけているのはさきほどと同じだが、今度は互いに寄り添ってはいなかった。どちらも背筋をおどろくほどまっすぐ伸ばし、片手を眉のあたりにかざして日の光をさえぎりながら、草の上にすわっていた。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（夜想曲集 / カズオ・イシグロ　）

**月夜と眼鏡**

町も、野も、いたるところ、緑の葉に包まれているころであります。

 ( 小川　未明　童話集)

葉桜の中の無数の空さわぐ　　　　　　　　（篠原　梵）

風入れてめざめかぐはし藤のころ　　　　　　（水原秋　桜子）

**業の花びら**

夜の湿気と風がはげしくいりまじり　松ややなぎの林はくろく

空には黒い業の花びらがいっぱいで　わたくしは神々の名をしるしたことから

はげしく寒くふるへている　　　　　　　　　（春と修羅　宮沢賢治）